

## 対談

### ～「天平筆」から「熊野筆」に至る筆文化について～

今から三十数年前、向久保健蔵さん(城之堀区在住)は、筆の里工房建設の契機ともなった、住民主体で組織された「筆の里くまの会議」のメンバーとして活動されました。

また、筆の穂先に使う毛(原毛)の科学的研究や、奈良の正倉院の宝物である「天平筆」の調査に携わってこられたなど、筆の歴史や文化といった方面にも造詣が深い筆職人の一人です。

令和7年4月30日に向久保さんを筆の里工房にお迎えし、同施設の管理者である一般財団法人筆の里振興事業団の石井節夫理事長とさまざまな視点からお話いただきました。

#### ～原毛研究、正倉院筆調査などを通じて想うこと～

##### (石井理事長)

本日は、筆文化の未来や熊野筆に関し、「天平筆から熊野筆に至る筆文化について」をテーマにお話を伺いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

この熊野の地では、200年ほど前から筆づくりを生業としています。「盆まぜ法」という製造工程の工夫や問屋制家内工業による生産効率の向上によって、明治期以降、大量生産地として目覚ましい発展を遂げ、日本一の生産量を誇る筆の町になりました。

筆づくりは職人同士の口伝による経験則に頼るところが多く、また、製造や販売行為に注力したものと思われることから、筆づくりの科学的な研究や筆が有する文化的、歴史的な探求への業界の関心は、さほど高くはなかったものと考えられます。

そうした産業風土のなか、筆事業協同組合の青年部長であった向久保さんは、筆づくり工程で初となる、科学的な調査研究を昭和57年に手がけられたと聞いています。こうした研究のほか、『The 筆』の執筆と出版、正倉院宝物の天平筆の調査にも携わられており、これは筆の産地にとって極めて有意義なことであったと思います。

まずは、そのあたりについて少しお話をいただきたいと思います。

##### (向久保氏)

筆事業協同組合青年部による調査研究は、旧来の伝統的な工法について、ある程度、近代化が図られないかという発想で行ったものです。穂先の原料である毛から脂分を取り除く「脱脂」についての実験では、県の福山繊維工業試験場や民間企業の協力も得て、電子顕微鏡により毛を詳細に観察するとともに、化学洗剤による洗浄の検討も行いました。

結論としては、化学的手法では採算ベースに合わないことや、素材である毛にダメージが生じる可能性があることがわかりました。加えて、伝統技法である“灰もみ”は、脂抜きをしながら毛を伸ばす作業を同時に行うものですが、「脱脂」に化学的な技術を採用入れた場合、毛を伸ばす作業とは別工程となり、かえって作業工程が複雑となり、非効率になることが想定されました。

モミ殻で作る灰を毛の束にまぜ込んで熱を加える“火のし”という伝統技法は、アルカリ性である灰によ

り毛も弱アルカリ性となり柔らかくなります。それを手でもみながら温度を下げると、毛はまっすぐな状態になってゆきます。こうした従来の工法が一番いいんじゃないだろうかという結論に達し、改めて、伝統技法を見直すきっかけになりました。

そうしたなか、出版社から筆に関する書籍出版の話が持ち込まれました。執筆の自信はなかったのですが、出版社の意向が「熊野が無理なら他の筆産地との交渉に変更する」ということでしたから、日本一の産地のプライドもあって、「僕が書きます」という流れになったんです。執筆に際しては、青年部の調査研究資料や筆の研究家である木村陽山の著書なども参考にしました。

正倉院宝物の天平筆の調査は、筆の里工房の企画展のイベントで来訪された、当時、宮内庁正倉院事務所長であった杉本一樹さんと知り合ったことがきっかけで、伝統工芸士の實森康宏さんと一緒に参加しました。はじめは正倉院宝物の筆ではなく、宝物に使われている毛の調査でした。伎楽面の髭とか毛氈(フェルト)の毛、僧侶が手にする払子(ほっす)という法具の毛などについてです。

筆の調査は、その後に行われました。始めの毛の調査では、大阪の工業試験場から様々な獣毛の科学的なデータを提供いただき、この資料が筆の調査でも大変参考になりました。正倉院宝物である筆は、見ることはできても、さわるとはできません。外見から、兎の毛だろう、とか、馬の毛だろうとか想定はできますが、確実性はありません。この判断を科学的な資料と照合することで、使われている毛の由来を証明することができました。正倉院の天平筆で一番多く使われているのは兎の毛でした。奈良時代の写経用の筆には、兎の毛が重要であったことがわかりました。正倉院では竹の調査もしており、その成果によって、中国で作られた筆や日本で作られた筆が混在していることがわかっています。正倉院の筆は、いずれも穂先の形成に和紙を用いた巻筆(まきふで)で、雀頭の形をしています。この雀頭のサイズから、短峰、中ぐらいの中峰、長めの長峰と、3つに分類することができます。

天平筆は、芯となる部分の毛の根元を和紙で包み、その上に別の毛を被せて和紙で包む工程を繰り返して作られています。江戸時代のものとは異なり、3回ないしは4回に分けて毛と和紙で巻き固めて穂先が作られています。巻き方が非常に精密に巻いてあるものやそうでないものがあります。中峰や長峰は精密さに欠けているといった印象でしたが、漢字を書く写経用の短峰の筆は、非常に精密に作られていました。

## (石井理事長)

筆の調査について、興味深いお話を伺いました。

熊野においては、筆を作ることと売ることに注力することで日本一の生産地に発展してきました。向久保さんも、初めのうちは筆の営業をされ、途中から筆の製法の研究や筆づくりの歴史的な背景といった、必ずしも筆の生産に直結しない事柄に興味関心を持たれています。筆づくりや販売に能力を発揮する人は多くても、文化的、あるいは、歴史的な背景に興味を示す人は、そうそういらっしやらなかったのではないかと思います。そこにはどのようなきっかけがあったのでしょうか。

## (向久保氏)

きっかけは、やはり書籍を出版したことです。家業が製筆業でしたので、日ごろから筆づくりは身近な存在で、私も真似事のようなことはしていましたが、筆職人の域には達していませんでした。

そうしたなか、本を出すことで、自分の中で葛藤が起こりました。筆を作る方法を本に書きながら、本人が筆づくりに自信が持てない、という葛藤です。どのような形のものが、それぞれのお客さんのニーズに合い、喜んでいただけるのか。そうしたことに関心が移り、筆づくりに専念しつつ、筆や文字の歴史と文化の研究がライフワークとなりました。

筆は、穂先の命毛の先の0.5ミリぐらい、その微妙なところで書き味が変わります。この微妙な差で、毛先が割れるとか、逆に、まとまりが良くなるとか。こうしたことは、実際に筆を作る経験がないとわかりません。毛を「選ぶ」という、職人の技がそこに出てきます。

自分が筆を作らないうちに職人さんにいろいろと注文を並べると、「じゃあお前作ってみいや」って、よく言われたものです。その度に葛藤を繰り返していました。その葛藤が筆職人になろうとする、大きな原動力になりました。納得できる筆を作るには、何十年という時間がかかりましたけれども。

### (石井理事長)

向久保さんが実践されたような、筆と文字の歴史的、文化的な関わりについては、筆の里工房においても、例えば、平成19年と21年に東京で筆づくりフォーラムを開催するなど、平成6年の開館以降、様々な活動や調査研究を行ってきました。

熊野筆はこれまで、品質が良く、求めやすい価格ということで市場を寡占してきたわけですが、人口減少や少子高齢化、あるいは、外国産の流入により、特に書道用の毛筆の生産量は大きく減少しており、市場の優位性を保つうえでも、歴史や文化といった側面からのアプローチは非常に重要だと思っています。

筆の里工房としても、書家や学生などのエンドユーザーと筆づくりの職人やそれを仲介する人たちとの文化的な交流など、熊野筆の付加価値につながる取組を今後も充実・強化したいと考えていますが、こうした点について、向久保さんのお考えや、最近取り組んでいることがあればお聞かせください。

### (向久保氏)

戦前から続く筆の専門店には筆職人がいて、エンドユーザーの声が直接届く環境にありましたが、熊野筆の場合は、いくつか存在する卸業者を介してエンドユーザーに提供する仕組みですから、書家や筆を使う学生の声が届きにくい供給構造にあります。

ところが、筆の専門店の状況も、ここ数十年の間に変わってきました。職人を有していた筆の専門店も、熊野などの産地や問屋から買い付けるようになり、エンドユーザーの声を耳にしてきた地域の文具屋さんの多くが店を閉じ、今ではスーパーで筆を扱いました。こうした分業化は効率的でしょうが、エンドユーザーの情報が製造元や職人に入ってきません。

反面、主流となりつつある通販は、お客さんの声が直接届く仕組みです。ですから、お客さんの要望に職人が応えられないと、お客さんに不満は募ります。通販という双方向性のある仕組みであっても、どこへ相談してよいのかわからない。書道の先生方も困っているといったジレンマも起きています。こうしたことは、やはり解決しないといけません。

私は、筆や書の歴史や文化といったことが好きだということもあり、正倉院の筆についても、そうした知識をもとに、職人の感性や視点から現物を見ることができます。書家や学者とは違う物の見方ができる、ということです。エンドユーザーへも、筆職人に歴史や文化への理解が深まれば、用途や書風に応じて更に専門的な対応ができると思っています。市場の優位性を保つうえでも有効でしょう

今、筆のほかに一番調べているのは、紙や紙の歴史についてです。日本の紙と中国の紙は違いますし、紙の厚さや硬さによって筆も変化してきたのではないかと考えています。エンドユーザーと筆づくり職人との交流、あるいは、こうした文房四宝に関する研究などは、筆の里工房がイニシアチブを取って進めてゆけば、それを行える条件や環境が揃っているのではないのでしょうか。

## ～「書」や「書道」、「書写教育」の現状から想うこと～

### (石井理事長)

書をたしなむという行為の前段階として、かなや漢字の文字に関心がないと、なかなかそこに繋がらないと思います。こうしたことから、次は、書や書道、書写教育の現状から想うことをテーマとして伺います。

書道は、2021年に国の登録無形文化財になりました。ところが、2020年のレジャー白書によると、日本の書道人口は220万人となり、2010年の530万人から10年間で半減しているという現実があります。この原因は、少子高齢化やデジタル化の影響が大きいとは思いますが、若年層を中心に書や文字への関心の低下も大きな要因の一つではないでしょうか。文字に関し、その成り立ちや意味といったことへの興味は薄く、文字の記号化が進んでいるといった感すらあります。

熊野町では、小学校1年生から書写書道の時間を設けていますが、町外では大抵が学習指導要領に従い小学校3年生から30時間、中学校の1、2年生学年が20時間、3年生10時間を割り当てているようです。書写の時間で初めて筆に墨を含ませ、半紙に文字を書くという体験をする場合が多いわけですが、現場の先生方からのお話では、40分から45分の授業の始まりと終わりに、それぞれ10分から15分は準備や片付けの時間に割かれてしまい、用具の取り扱いも大変だということです。

塾で小さいときから書道に親しんだ子どもは別にして、大概是中学校を卒業すると書道からは離れてゆきます。書は難しい、書けない、あるいは、読めない。読めても意味がわからないとか。学校で書写教育をやることで少しは書や書道に触れることには近づきますが、逆に、気持ちはどんどん離れてゆくというのが実態ではないかと懸念しています。試験科目でもありませんしね。何よりも、高校卒業後は、ほとんど書とか書道に触れる機会はなく、あったとしても極めて限定的だと思います。

今、書道人口は減少の一途をたどっています。もともと筆で文字を書くことは生活の一部であり、教養、嗜みであったと思います。その書道がユネスコの文化遺産になろうとしています。生活文化であった書道が、文化財や文化遺産として扱われる、そんな時代を迎えています。

こうした現状は、早晩にドラスティックに改善するはずはないのですけれど、こういう年齢層に向けた書道教育が必要じゃないかとか、あるいは、毛筆で書くことの前に手書きを推奨する必要があるとか。筆づくりの町として、書や書道の文化を継承するために、こうしたことを続けたらいいんじゃないかといったご意見はございますか。

### (向久保氏)

筆を取り巻く環境は、これからますます厳しくなるでしょうね。なぜなら、これだけ筆に代わるものがいっぱいできているわけですから、当然といえば当然でしょう。

だけでも、じゃあ、全く筆や書に関心がないのかということ、私が受けている感じとしては、そうでもありません。ですから、大切なことは、書に親しめるシステムを作る、ということではないでしょうか。

絵てがみであるとか、会場で書きあげる席書であるとか。そうした創作体験の場が必要だと思っています。学校では書の体験が少なくなっています。指導者がいないので、中学校や高校の書道のクラブ活動も衰退してしまうのではないのでしょうか。だからこそ、筆づくりのまちである熊野で、書道体験ができる“場”を作ることに意味があるのだと思います。

毎年、創作体験のために熊野を訪れる人の流れを作ることは、まちの活性化にもつながります。日本一の筆の産地である熊野で創作活動をするには、大きな誇りであり、感動すると外部の参加者から言われます。私たちが普段感じていることと、筆のまちを訪れる人々の受け止め方とは、大きな開きがあるよう

です。

### (石井理事長)

鉛筆やボールペンや万年筆で文字を書くことすら本当に少なくなっていますが、毛筆は柔軟性があるため多彩な表現が可能な優れた筆記具です。確かに筆の取り扱いが難しく、作品としての巧拙もわかりやすいのですが、硬筆で書くよりも圧倒的に情報量が多く、書いた人にとっても、受け取った人にとっても電子メールや鉛筆で書いたものとは違う感覚が得られ、伝わると思います。

先ほど、自宅で制作した作品で応募してもらうのではなく、書を志す人のメッカともいえるこの町に来て、筆を手にし、墨を含ませて文字を書く、そうした創作活動が大切であるというお話をされました。

筆の里工房でも絵てがみなどの体験ができますが、新施設の整備によって、創作系機能を拡充するための器ができてまいります。

新施設で特に意識をしている年齢層は、子育て世代の親子です。創作とか、あるいは、書のことについての理解が深まるようなプログラムについて検討をしているところです。

以前、未就学児の書道についてお話をされていたような気がするのですが、そのあたりを含めて、先ほどの熊野町に来て、筆を持って字を書くような行為、それから、年齢層は問わないとしても、主に若年層や年少者に向けた取組、作り手からのお考えでも結構です。何かご意見があればお願いします。

### (向久保氏)

子どもも、学校の先生方もそうですが、体験や勉強をしたい人はたくさんいます。書写とか習字を教えたいけど、そのような勉強をする場所がないんですよ。ないから指導者も育ちません。

だから、やはりこの熊野で実際に創作活動をするといった、1つの大きな流れというか、システムを作らないといけません。最初から無理はしなくていいんです。小さく初めても、続けていくことが大事ですから。

書道塾に通う子どもたちの大半は、小学校、幼稚園の子どもたちです。私どもの通販サイトには、「子どもたちに習字をさせたいが」といったお問い合わせをいただくことがあります。それに的確に応えるためには、大きさや穂先の形状などが子どもに適した道具を作っておける必要があります。作る側の私たちが考えないといけない事柄です。

平安時代からの筆を見てみたら、みな長峰ではなく、穂先の短い短峰なんです。だから、子どもたちが書きやすい短峰の筆を作らないといけない。家にある筆を使わせるのではなくて、子どもたちに向けた筆を提供できる体制を整える努力が私たちに必要です。この年齢で、あるいは、この文字を書くのならこの筆で、更には言えば、この筆ならこの紙と墨で、といった具合にです。

筆の里工房でのサービス提供に際しても、創作や手書きに興味がわく、細やかな配慮が大切ではないでしょうか。

## ～熊野筆の県無形民俗文化財指定を受けて想うこと～

### (石井理事長)

道具の良さという視点も大切で、初学者だからとか、あるいは、年少者だから安い道具でもいいといったことではなく、筆は単に文字を書くだけではなく、日本の文化を支えてきた道具でもあり、墨や硯や紙もやはり日本の伝統文化だから、そういったものもあわせた感性の教育が大切であるというお考えだと思います。

ます。

日本の伝統文化の継承という面からは、本物の良い道具をこれからも提供してゆく必要があり、筆づくりの技術をしっかりと継承しなければなりません。

そこで、次に、熊野筆が県の無形民俗文化財に指定されたことについてお聞きしたいと思います。

歴史と伝統のある熊野の筆づくりの技が、文化財に指定されたことは大変喜ばしいことだと思います。生業であった筆づくりという工芸技術が民俗文化財に指定されたということは、日常的な生業の技が、保護とか管理とかの対象とされたということでもあります。

筆づくりの継承の観点からいうと、これから熊野筆にどのような付加価値を与えるのかといったことが大きな命題の一つであろうかと思っております、筆事業協同組合も熊野筆ブランドの維持向上に腐心されております。

ブランド化には、先ほどから出ております文化的な背景であるとか、商品のイメージといったこともそうなのですが、基本的には、この町でいい筆を作るということが、最も大きな付加価値だと思います。

このブランド化について、業界に長く携わってこられた立場からの思いであるとかお考え、そして、筆の里工房がこうしたことにどのように関わってゆけるのかについてのお考えをお聞かせください。

**(向久保氏)**

ブランドとは、要するに「信用」なんですよ。熊野筆の信用度をどれだけみんなが作り上げてきているかということが大きいと思っております。

熊野筆の信用度を高めるには、職人個人の信用度が不可欠ですが、そのレベルアップを業界の力だけで成し遂げることはできません。職人個人がどれだけ筆に情熱を注ぎ込んで作り上げているか、いかにお客さんを大事にしていくかなんですよ。工芸の世界では共通することですけどね。お客さんの意に沿うようなものづくりをしていくために、職人は、技術とモノづくりへの執念をどんどん積み重ねていくしかないんです。無限にね。

私のところへ来られたお客さんで、「隷書を書きたいんだけど、どういう筆がいいですか」って問われた方がおられます。その方はヤギの毛を束ねた柔らかい筆をお持ちでした。隷書は硬い線ですから、どう考えてもお持ちの筆で書けるわけありません。腰がない筆だからです。

「宋の時代の臨書をしたい」といったような相談もあります。宋の時代では羊毛による作品も多いので、こうしたことを踏まえると、お客さん向きの筆をお勧めすることができます。

筆職人にも、中国や日本の文字に関する知識が必要だと思います。

熊野筆のブランドづくりへの筆の里工房の関わり方についてですが、筆や文字の文化や歴史に関心を持つ人たちを育てていく、それを一緒になって考えていくといった取り組みに期待しています。

## ～筆の里工房のこれまでとこれからについて想うこと～

**(石井理事長)**

いい筆づくりをするという理念に向き合うには、技術だけではなく、例えば、中国とか日本のいろいろな筆法や様々な書家の先生の書風のほか、筆や文字の文化や歴史を知ることも必要で、職人や営業マンには、それらをエンドユーザーにちゃんと説明できる力量を備えることが望まれるということ。そして、それが「信用度」に大きくかわかり、筆の里工房の役割にも通じる、というお話でした。

最後に、筆の里工房のこれまでとこれからについてというテーマでお聞きします。筆の里工房は、平成6

年に開館をし、昨秋に30周年を迎えました。筆をテーマにしたミュージアムとして創設された施設ですが、筆の文化や歴史にまつわる博物館的な要素のほか、筆で表現された書、絵画、アニメ、工芸などを紹介する美術館的な要素に加え、中国も含めた筆や筆づくりの情報を収集し発信する図書館的機能も拡充しています。

特に、筆に関する文化的な背景について積極的に発信しようと努めてきたわけですが、こうした筆の里工房を、どのようにご覧になっていますか。

### (向久保氏)

筆の里工房は、30年かけて現在の形を築いてこられました。当時の関係者の一人として、当初は少なからず不安がありましたが、日々の取組を積み重ねることによって、一つの姿が形成されていると思います。筆を中心とした文化や歴史、文字や絵画も含めてのことですけれど、こうしたことの発信は、熊野ならではの魅力として、非常に大事な部分だと思います。

これからの熊野町の発展には、もちろん、移住や定住を促すことも大切ですが、多くの人に訪れていただくことが、町の活性化にとって最も大きな要素であると思います。

これからも、筆の里工房から情報を広く発信し、来訪いただいて、楽しんでいただき、いい思い出を作ってください。そしてリピーターになっていただくこと。筆の里工房の良さを広める活動に尽力すべきです。基本的に人間は、楽しいことは長く記憶に残りますので、こうした点を大切にして、これからもいい施設づくりを目指して欲しいと思います。

熊野の魅力は、まだまだ大きく、そして、広がりを持ってくると思うんですね。例えば、小さい子供たちの書の体験は、手で文字を書くことや文字そのものへの興味や関心を持たせる大きなチャンスになるはずです。だから、筆の里工房では、見て、触れて、楽しむ。そうした体験のための様々なプログラムを展開する重要な拠点であると思っています。

### (石井理事長)

筆の里工房の開館当初を振り返りますと、基本的な体制づくりという点で腐心をしたわけですが、次第に収蔵品も増えてまいりました。実物の筆の収蔵品に木村陽山や三清書屋のものが加わり、今や世界屈指のコレクションを誇り、日本各地から注目されるようになりました。奈良時代から近現代に至る書や絵画作品の収蔵も進んでいます。近年では学術的なネットワークも広がり、国宝や重要文化財を扱う非常にアカデミックな展覧会を催すなど、筆をテーマにした非常に特徴的なミュージアムとして、日本博物館協会などからも注目されています。

先ほども触れましたが、筆の里工房は、博物館的機能、美術館的機能及び図書館的機能を兼ね備えた施設です。令和5年に博物館法が改正され、まちづくりといった地域課題への貢献も期待されることとなり、同年に当館は、博物館に“相当する”施設から、博物館法に基づく「登録博物館」として登録されました。

そして来年には、筆の里創造の丘公苑の整備の一環として、創作体験的な機能を持つ新施設が完成します。今までの筆の里工房の3つの機能に加え、創作体験系の機能を有することになります。

この施設での取組や運営、あるいは、課題などについてお考えがあればお聞かせいただけますか。

### (向久保氏)

施設での取組についての具体的なイメージは直ちに思い浮かびませんが、創作的体験メニューをどんどん増やしていくことが大切でしょうね。そうすると、県外からの来訪者も増えてくるでしょう。

そうすると、宿泊が必要なお客さんも楽しんでいただけるような対応も課題になってくると思います。

私らが書写イベントなんか携わると、いつも問題となるのが宿泊場所です。日本に唯一のテーマ性を有する筆の里工房は、外国からの誘客もかなり期待できると思いますが、宿泊施設がないとなると敬遠されてしまいます。これをどのように解決してゆくのかが問題ですよ。

### (石井理事長)

確かに、体験とか創作とか交流とかと言いつつ宿泊機能は欠落しており、飲食サービス機能についても弱点ではありますが、こうした機能は民間活力に委ねるしかないのが実情です。

私たちも、書道関係の方が来訪されて揮毫するといった機会を持つことがありますが、時間を気にしながら創作をして、急ぎ帰途に就かれています。ですから、宿泊についての問題性は認識をしています。

ここ数年中断していますが、県外から書道関係の大学生を招き、泊まり込みで筆づくりの職人さんたちと交流をするプログラムを何度か行ったことがあります。筆の「作り手」と「使い手」の交流がない、情報交流がない、ということから、民家や公共施設を宿泊場所にして取り組んだものです。

こうした例のように、町内の既存施設などを活用しながら、まずは、可能な取組から始めるということはあるかと思っています。

新施設は創作体験系の施設になります。熊野は筆づくりで発展してきた町であり、「手」で物を作ることで発展をしてきました。今からどんどんAIの時代になりますけども、人間がその創造性を高め、想像力を発揮するには、やはり手と指を動かすことが大切で、記憶力も高まるといいます。

また、実際に物を作るという行為は、単に造形物が形づくられるだけではなくて、感性とか芸術性みたいなものも形成されるはずですよ。

更に言いますと、そういう取組を筆の里工房だけでやり切れるものではないですから、教育とか福祉とか芸術とか文化とか。そういった様々な部門のほか、業界、金融機関、商工関係者といった様々なステークホルダーや町内にお住まいの皆さんと連携をして、新しい熊野町のイメージである「文化芸術のまち」の創造に向けて取組を進めていこうと考えています。

今、SDGsとかDIYとかアップサイクルといった言葉が氾濫していますが、冷静に考えてみますと、それらは全て伝統工芸に通ずる考え方だと思います。デジタルの時代であるがゆえに、アナログ的なところに視点を置いたまちづくりを進めていこうということなのです。

今回の対談の締めとして、我々のこうした取組の方向性に対し、ご意見をいただきたいと思っています。

### (向久保氏)

熊野町の未来を担う若い人が、筆や筆の文化に興味関心を抱いてくれるよう、育成につながる取組に注力されることに期待しています。

若い人は未来を作ってくれます。熊野筆の継承の問題についてもそれが言えます。私たち作り手は、若い人が「筆づくりは楽しんだ」とか「筆づくりには未来があんだ」といった気持ちや希望が持てるような環境を作っていかなければならないと考えています。

新しい施設づくりについても、若い人たちの声を柔軟に取り入れ、若い人を引き付ける魅力ある施設づくりを進めて欲しいと思います。

### (石井理事長)

新施設は、地域の方々の参画なくしては成り立たないと考えておりまして、クマノ・クリエイティブ・パレッ

ト、略してKCPという組織づくりを進めています。新施設でどんなことができるだろう。自分ならこんなことができるし、こんなイベントなら参加したり協力したりできるよ。そういう参加者主体で活動する組織に、今のところ 200 人ぐらい集まっています。

これから1年先に開設予定の新施設の運用については、そうしたメンバーと連帯し、地域の方々に意識を向けていただけるような、あるいは、参画いただいて新たな自分を発見してもらえるような、クリエイティブな活動の場を提供し、取組を展開したいと思っています。

このような創造性豊かな空間を作っていくということで、公園の名称も「筆の里創造の丘公苑」となる予定で、パークの“園”ではなく“苑”を用いるなど、こだわりを持ちながら、熊野町のシンボリックな空間を育てていきますので、引き続き、様々なご意見をお聞かせいただけると嬉しいです。

本日は、ありがとうございました。

**(向久保氏)**

ありがとうございました。